

自主学習ノートによる自ら学ぶ力の育成に関する研究

～思考や認知過程の内化・内省・外化を促す働きかけを中心にして～

M11EP001

芦澤 稔也

1. はじめに

自ら学ぶ力を育成するためには、生徒が家庭で主体的に学習することが必要不可欠である。「家庭学習ノート」や「自主学習ノート」と呼称は異なるが、多くの小・中学校でこのようなノートが採用され取り組まれている。

しかし、図1からわかるように本校2年生への調査でも、前向きに自主学習に取り組んでいるとは言い難い状況がある。「面倒くさくて仕方なく…」「あまりやる気ではなく…」といった記述が多く、学習の中身も「ほとんどが単語練習か漢字練習」「とにかくページを埋めていた」というものが目立った。自主学習という名の強制的・受け身の学習がなされていたことがわかる。

昨年度行った小学校において可能であった「自主学習ノートによる自ら学ぶ力の育成」(芦澤, 2011)が中学生においても同様に可能なのか探してみたいと考えた。

中学生の自主学習に対する実態把握
(1) どんな気持ち
<ul style="list-style-type: none">面倒くさくて仕方なく…あまりやる気ではなく…みんなやるということになったので…積極的だったとは言えない…2ページというのが苦痛だった。将来の自分のためを思って…毎日しっかりやらないと、みんなと差がついてしまうから…
(2) どんな自主学習
<ul style="list-style-type: none">ほとんどが単語練習や漢字練習(多数)困ったときは、単語・漢字・計算ノートや教科書から、図や表など大きく書いてスペースをうめていた問題集の問題を写し、それを解いていた2ページうめるのが大変で、昔やったことを何度もやり直した最初のうちは前向きだったが、だんだんいい加減になった

図1: アンケート結果

2. 研究の目的

本研究の目的は、自主学習ノートを作成させることにより、自ら学ぶ力(堀, 2011)の育成を図ることである。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

富士川町立A中学校2年生 127名

(2) 調査期間

平成24年4月22日～平成25年3月

(3) 調査方法

自ら学ぶ力の育成をめざした実践として、学年の生徒全員に自主学習ノートを作成させた。ノートは、その日の授業を振り返り学習した内容をまとめたものである。それに取り組むことにより自ら学ぶ力の育成を図った。とりわけ重視したのは、以下の4点の方法である。

① 長期間継続して取り組める動機付け

通常行われている自主学習ノートは、何のように書いてもかまわないとされることが多い。今回の自主学習ノートへの記録は、その日に行われた各授業の最重要事項のみに絞った。また、教師のコメントもコンパクトにまとめることを心がけた。さらに、様々な方法で生徒の内発的・外発的動機付けを行うことで長期間継続することを可能にした。

② 記録内容の質的向上を図るための指導目標および学習目標の設定と磨き上げ

自ら学ぶ力の大きな要素の一つは、要点を自ら考えまとめることにあると考えた。また、復習の時間の効率を上げることも狙い、授業の最重要事項に絞った。一番大切だと思うことを生徒が自分で考えてまとめることは、新指導要録で例示されたパフォーマンス評価にあたる。ノートを継続していく上で生徒は、生徒の学習目標を設定し自分のノートを自己評価していく。同様に教師側も教師の指導目標を設定し生徒のノートの変容を把握する。

③ OPP シートを利用した思考や認知過程の内化・内省・外化をうながす働きかけ

生徒が記録した内容をさらに良くするためには、教師の働きかけが必要不可欠であると考えた。生徒が記録した内容に対して教師が適切なコメントを与えることにより、その情報を生徒が取り入れ（内化）、いろいろと思いをめぐらす内省を促し、次の記録である外化（堀, 2009）につなげていくという働きかけである。また、1冊のノートが終了した生徒には、図 2・3 に示した OPP(One Page Portfolio)シート（堀, 2006）を使い、自主学習ノートに取り組む始めと終わりの変容を意識化させるため、自己評価をさせた。

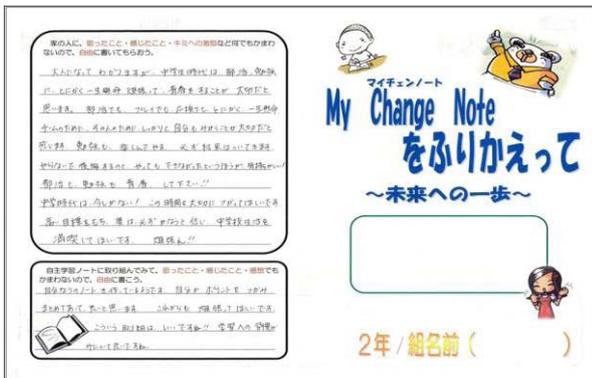


図2： OPP シートの外側

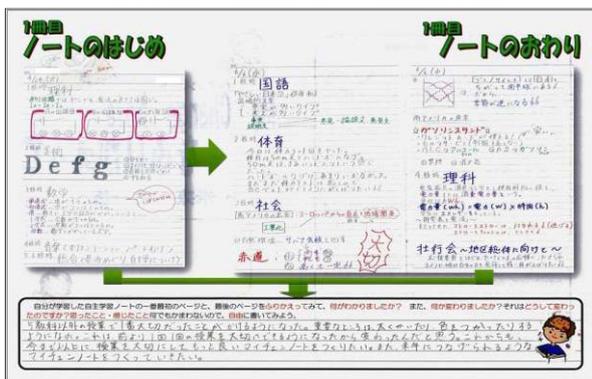


図3： OPP シートの内側

④ 生徒による自主学習ノートの自己・相互評価および保護者評価

OPP シートによる自己評価に加え、お互いのノートを見合うことによる相互評価も行った。ノートの良い点・改善点を評価し合うことにより、自分のノートに生かしていこう

とする姿勢を育てることを可能にすると考えた。また、家庭との連携を図ることを目的に、自主学習ノートに対する「振り返りシート」を保護者に記入してもらい、これも他者評価とした。生徒が学校で毎日何を学び、自ら学ぶ力を育成するために教師がどのような働きかけを行っているのかを具体的に理解してもらうために重要な契機となると考えているからである。



図4： 自主学習ノート1年の流れ

上記以外に自主学習ノート導入以降、教師が適宜必要な働きかけを行った。その具体的内容と過程を示せば、図 4 のようになる。

4. 研究の結果と考察

(1) 長期間継続して取り組めるための動機付けの内容

生徒のやる気を高める外発的動機づけだけではなく、有用感や充実感を刺激する内発的動機づけを行った。

① ノートへの日々のコメント

短時間でチェックし終えるようポイントを絞り簡潔に、生徒の内省をうまく機能させるコメント（図 5 参照）を書く。外化された生徒のノートをチェックし、フィードバックする。これにより、生



図5： 自主学習ノートへのコメント例

徒は自らの考え方ややり方を再吟味し、工夫・改善する。同様に生徒のノートを見ながら教師も自分自身の授業改善に役立てる。

② 見本例・参考例の掲示

廊下に掲示スペースを確保し「効果的な変容例」を掲示した。この際、成績上位層に偏らない配慮をした。図6のようにここに貼られることは生徒にとっての意欲喚起にもつながっている。

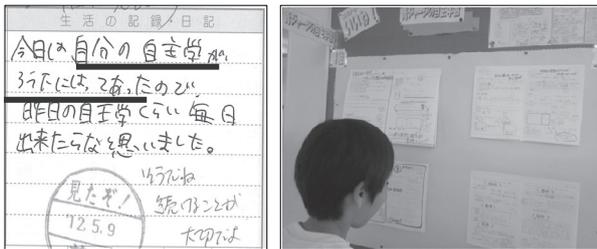


図6: 左・生徒の記録 (S.H.女子生徒) 右・廊下の掲示スペース

③ 学習指導部による各種キャンペーン

生徒の自治活動として、学習指導部(各クラス6名計24名で組織された生徒の組織)により各種キャンペーンが企画された。自主学習ノートに取り組んだページ数を競い合うことはノートの質の低下等デメリットもあるが、テスト前の外発的動機付けの一つの手段としては有効である。

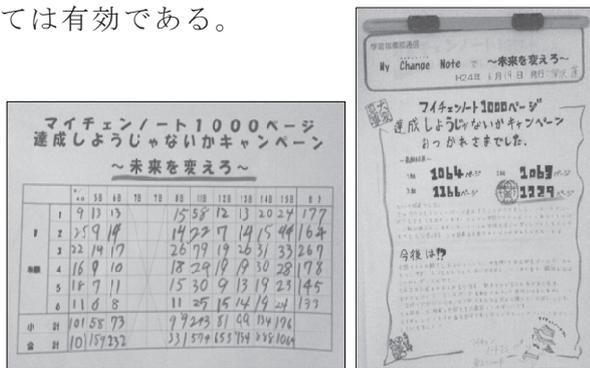


図7: キャンペーン記録用紙と学習指導部だより

④ 内・外発的動機付けとしての働きかけ

(ア) 自主学習ノートの名称募集

生徒から自主学習ノートの呼び名を募集することによって、ノートが「My Change Note ~未来を変えろ~」(以下自主学習ノートをマイチェンノートと記す)と命名された。学習に関する取り組みはともすると、いつでも教

師からの押しつけになってしまいがちである。そのため、生徒が主体的に取り組めるような配慮が様々な場面で必要であると考えられたからである。

(イ) 1冊終了ごとに授与する賞状

マイチェンノートの一冊終了時に、生徒に賞状を渡すようにした。やはり、マイチェンノートは継続してこそ価値が高まるので、そのためには外発的動機づけも重要である。

(ウ) 終了ノートの量を示すマイチェンタワー

生徒のマイチェンノートが一冊終了する毎に、教室の後ろの棚の上に積み重ねるようにしていった。単純で楽な取り組みであるが、ある程度積み重なってくるとかなり迫力もでてくる。また、50冊・100冊目をカウントダウンするとクラスとしての盛り上がりも出てくる。これは、クラス皆で取り組んでいる象徴であり、クラスへの帰属意識を高めるとともに生徒にとって自慢となる。



図8: 教室のマイチェンタワー

(エ) 自主学習ノートに取り組むことによるテストの達成感

図9に代表されるようにノートも3~4冊目に入ると、OPPシートにテストとマイチェンノートとの関連についての記述が出てくる。自分のノートへの頑張りがテストの結果に表れることは、内発的動機付けにつながっている。

(2) 記録内容の明確化のための指導目標および学習目標の設定と磨き上げ

記録内容を明確化することにより、日々の授業と家庭での学習をつなげるだけでなく、前日の自主学習と今日の自主学習、そして明日の自主学習へとつなげることも可

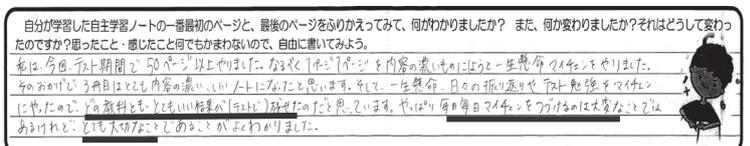


図9: OPPシートへの生徒の記録 (O.M.女子生徒)

能にしていった。十か条は、開始当初は最低限のルールを提示したが、マイチェンノートと命名してからは自分なりの十か条（学習目標の設定）を決め（図10）日々のマイチェンに取り組んだ。この十か条については、ノートが1冊終了するごとに書き直し、表紙裏に貼るようにした。



図10：マイチェンノート十か条

① 教師によるノートの指導目標

生徒のノートの変容を客観的に判断するため、教師による図11のような指導目標を定めた。これはあくまで教師の指標であり、生徒に公表するものではない。



図11：マイチェンノートの学習目標

4月・5月・7月・10

月と4回にわたり、全生徒の様子を観察した。

② 生徒によるノートの学習目標

取り組みを進めていくと、生徒は生徒なりのノート基準をつくるようになる。「マイチェンノート」をさらによくするためのアンケート」を実施することにより、各生徒が自分なりの「学習目標」を設定するようになる。

生徒自身が自分の学習目標を設定することは自ら学ぶ力の育成に大きく関わってくる。

③ ノートの質的変容の把握と内容

表1は「教師の指導目標で担任が評価」したものと「生徒の学習目標で生徒が自己評価」したものの集計結果である。開始当初のC・Dランクの生徒の割合と十月上旬のものがほぼ逆転（教師・生徒双方）している。長期間継続のための働きかけが有効に働いていると言える。これらはそれがそのまま自ら学ぶ力の育成であるとは言い難いが、少なくともそ

の土台となるものがつくられようとしていることは事実である。

教師と生徒の独立した基準でも、各ランクの割合がほぼ似通ってきているのは、生徒の基準がより質の高いものになっていると言えよう。あくまでも自分の実態を踏まえて自己評価し、レベルアップしていくことが大切である。これがうまく機能するようになれば、自ら学ぶ力の評価として位置づけることができると考えられる。

表1：教師の評価と生徒の自己評価

教師の指導目標で担任教師が評価					生徒の学習目標で生徒が自己評価				
	四月	五月	七月	十月		四月	五月	七月	十月
A	0.0%	9.2%	11.8%	11.8%	A	0.8%	5.0%	10.9%	17.6%
B	6.7%	21.0%	27.7%	24.4%	B	12.6%	17.6%	25.2%	37.0%
C	17.6%	37.8%	38.7%	42.9%	C	12.6%	32.8%	37.8%	31.1%
D	40.3%	29.4%	21.0%	16.0%	D	31.1%	31.1%	21.8%	10.9%
E	35.3%	2.5%	0.8%	5.0%	E	42.9%	13.4%	4.2%	4.2%

(3) 思考や認知過程の内化・内省・外化をうながす働きかけ

生徒が、マイチェンノートに取り組むことで、その日の学習内容を振り返り（内化）⇒自分を見つめ熟考し（内省）⇒ノートに記録し（外化）⇒次時（明日）への見通し・目標を持ち⇒何が必要かに気づき⇒次の日の授業⇒という図12に示される思考や認知過程の内化・内省・外化をスパイラル的に行うことにした。こうした働きかけは、生徒自身が自分の変容を意識化し、自ら学ぶ力を育成するためにきわめて重要であると考えられる。

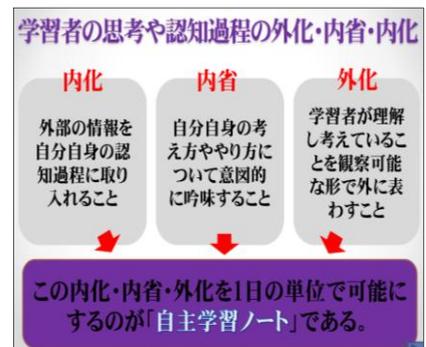


図12：学習者の認知過程の外化・内省・内化

① OPPシートの作成およびその記述から得られた知見

自ら学ぶ力には、自己の変容を適切に見取ることがきわめて重要であると考えられる。ノートが1冊終了するごとに書かせたOPPシートにより生徒は、初めて自己の変容を認識できる。生徒の記述から「最初はただの苦痛にしか感じなかったけど……だんだん楽しめるようになった。」「今では習慣になった」(図13参照)といった充実感や達成感・満足感が得られたり、次への意欲が湧いていることがうかがえた。

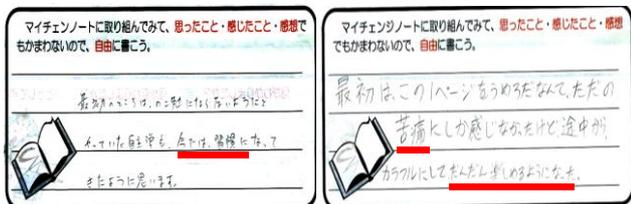


図13: OPPシートへの生徒の記録 (O.H.;女子生徒・M.D.;男子生徒)

これは内省の中でも、見通しをもったり目標や活動を吟味、検討したりという「予見的内省」、活動を振り返って意味や価値を見出すという「遡及的内省」の力が育成されていることをあらわしている。

また、OPPシートの効果的などころはすべての子どもに通用するという点である。筆者はこれまでに自主学习ノートに取り組む上で、生徒の見本例となるノートを掲示したり、学級通信において紹介したりと全体のノートの質を高めようとしてきた。

しかし、主に成績上位層の生徒が学習した掲示されるノートは、一部のごく限られた層の生徒にしか効果的な見本例とはならず、成績下位層の生徒にとっては見本となるよりもむしろその乖離を認識させられ、意欲の低下につながっていた。また、見本例として掲示されるようなノートを提出する固定化された生徒に対し、その質をさらに上げるような適

切なアドバイスを与えることが出来ずにいた。

生徒にとって学習評価は、自らの学習状況に気付き、その後の学習や発達・成長が促される契機となるべきものである。OPPシートを使うことによって、成績に関わらずすべての生徒が過去の自分のノートと現在の自分のノートと比較するという自己評価をすることによって、自己の変容を見取ることが可能にしていっただのである。

② マイチェンノートの変容

教師による日々のコメントにより、生徒は内化・内省・外化を繰り返す。この一連の流れがスパイラル的に行われることによって、生徒のノートは図14のように変容していく。最初は1ページ、それも教科名に加えて一言書くのが精一杯だった生徒が、授業の内容(感想)を書くようになり、やがては明確にその日の授業を振り返ることができるようになってくる。

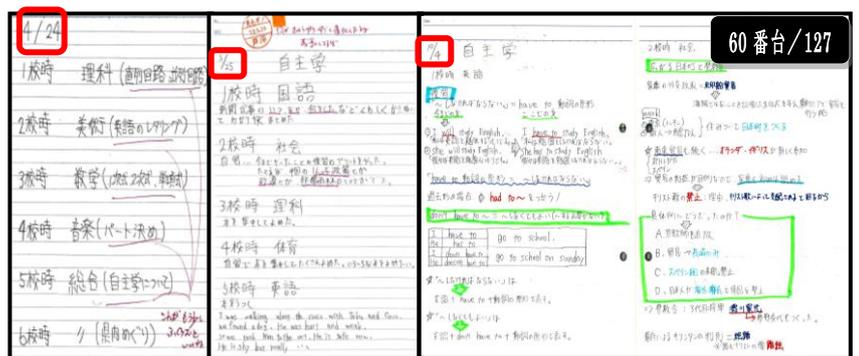


図14: 生徒のマイチェンノートの変容 (M.R.;男子生徒)

③ マイチェンノートに見られる生徒の工夫点

(ア) 吹きだしやイラストを使って工夫しているノート

図15の生徒は、

オリジナルのキャラクターを登場させメタ認知している。これらのキャラクターは継続してノートに登場する。



図15: ノートに見られるオリジナルキャラクター (N.R.;女子生徒)

(イ) 今日の授業+αの学習が行われているノート

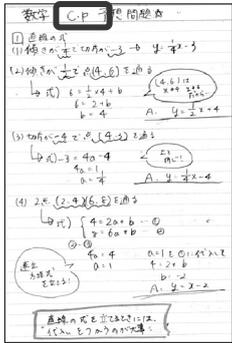


図16: 生徒のマイチェンノート (O.M.;女子生徒)

図16の生徒はC・P (Challenge・Page) と題し、授業の内容+αの学習を展開している。定期テスト前はこういった生徒が増える傾向にあるが、中には毎日このように+αの学習をしている生徒がいる。まさに自ら学ぶ力が育成されている典型例である。

(ウ) 自分自身の目標を裏表紙に書いたりしているノート

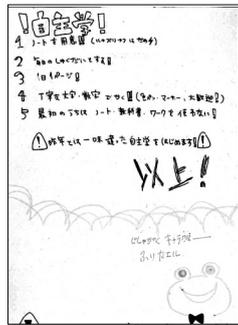


図17: マイチェンノートの裏表紙 (T.N.;女子生徒)

図17のように表紙や裏表紙、ノートの最初のページなどに自分の目標や自分を鼓舞するような言葉を記入する生徒がいる。これは、そのノートに対する思い入れであり、やらされる学習から自主的な学習ノートへの第一歩である。

(エ) 同じ授業を受けても違うノート

図18は、ある日の理科の授業を振り返っている3人のノートである。このように同じ授業を受けた生徒であっても、内化・内省され、それぞれ違った外化が行われている。授業ノートをただ写すという受身の学習では決してつくることができないマイチェンノートである。

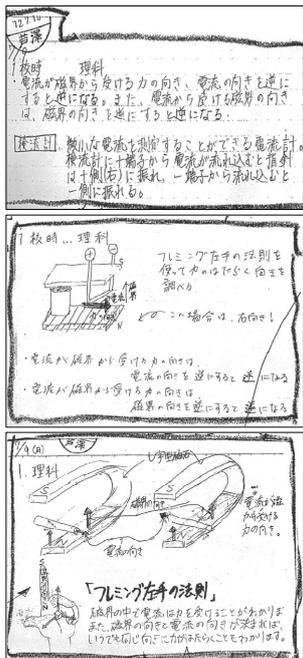


図18: 生徒のマイチェンノート

(オ) 知らず知らずのうちに理科の成績アップが図られた生徒

図19の生徒は、特別に理科を中心に勉強しようとしていたわけではないのだが、振り返ってみると理科のマイチェンがとても丁寧であることがわかった。定期テストの結果に目を向けると、前期中間テスト58点、前期期末テスト81点、後期中間テスト85点であった。日々のマイチェンが定期テストの結果に結びついた例である。

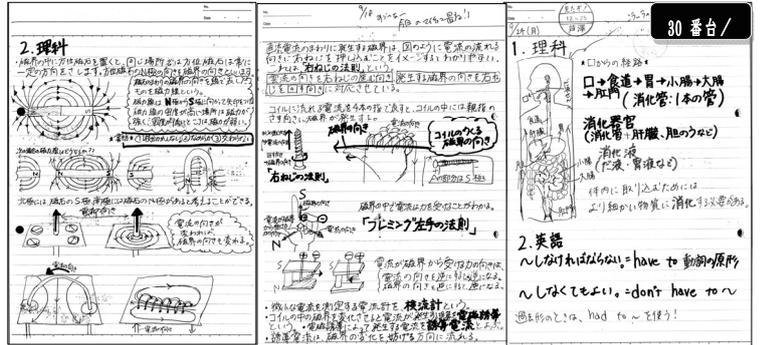


図19: 生徒のマイチェンノート (K.M.;女子生徒)

(4) 生徒による自主学習ノートの自己・相互評価および保護者評価

① 自己評価

(ア) OPPシートによる自己評価

OPPシートに書かれた「前より1回1回の授業を大切にできるようになった」という図20の記述から、日々の授業を受ける態度の変容を見取ることができる。

また「マイチェンは見返すだけでテスト勉強ができるものに…」 「テスト前とかつかえる」といったマイチェンノートが定期テスト前に貴重な参考書となっていることがうかがえる記述もでてくる。ノートの成果がテスト結果に現れた生徒については、もうこちらが様々な手立てを取るまでもなく授業で、そして家庭で「自ら学ぶ」ようになる。

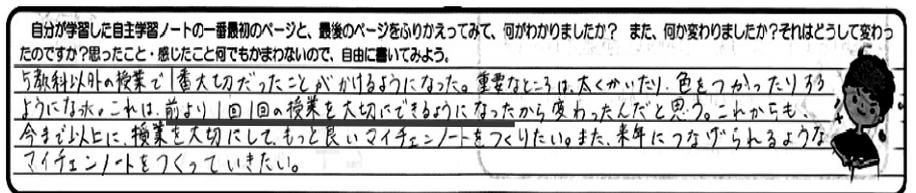


図20: OPPシートへの生徒の記録 (N.A.;女子生徒)

(イ) 振り返りシートによる自己評価

マイチェンノート始めて約半年たった頃、図 21 のようなアンケートをとった。「友だちに積極的に聞くようになった」「黒板には書かなかっただけれど話していたことはメモするようになった」といった生徒の記述から授業に臨む姿勢にプラスの変化が見られたことは明らかであろう。授業に臨む姿勢の変化は「自ら学ぶ力の育成」に大きく関わっている。

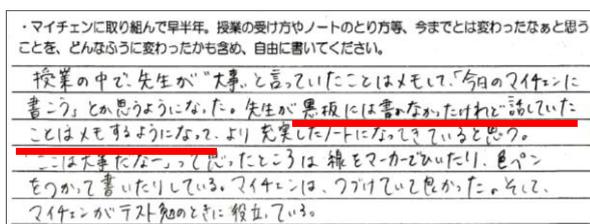


図21：生徒の記録 (H.M.;女子生徒)

② 保護者による評価

(ア) OPP シートによる保護者評価

保護者は、学校における学習評価の在り方や生徒の学習状況について、より一層把握したいという要望をもっていると考えられる。保護者の OPP シートに書かれた「1冊目始めと終わりの充実度の差に驚き…」という記述からは、生徒の変容を保護者も見とっていることがわかる。(図 22 参照) また「マイチェンノートを見てびっくりしました。家であまり勉強をしていないように見えるけど…」という記述からは、数か月にわたり生徒が取り組んでいることであっても、具体的な事例を示さない限り、理解してもらいにくい実態が浮かび上がってくる。このことから、OPP シートの有効性が実感できる。

一方、小学生の保護者にはみられなかったが「成績との関連」や「字の丁寧さ」「ノートへの取り組み」に言及するダメ出しの記述が見られるようになるのも中学校保護者の特徴である。これは、高校入試をひかえどうしても保護者の関心が「成績」に向いていくことを表している。

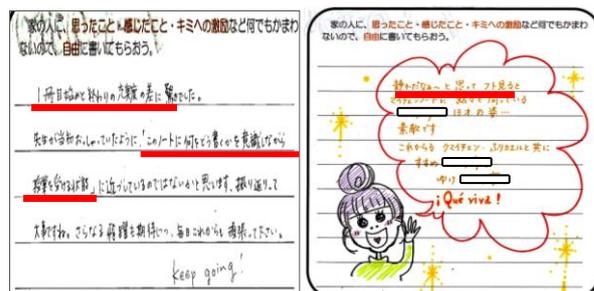


図22：保護者の記録 (S.Y.;母親・T.N.;母親)

(イ) 振り返りシートによる保護者評価

図 23 の記述から、マイチェンノートへの取り組みを通して「勉強させられている」という受け身の姿勢から「勉強を楽しんでやること」へと変容している、また「家での学習が習慣となり定着した」と保護者が見取っていることがわかる。

生徒の学習に対して重要な責任を負っているのは教師であることは間違いのないのだが、このように良い形で生徒の変容を知らせ、保護者をも巻き込むことによって、生徒の自ら学ぶ力が育成されていくのだと考えられる。

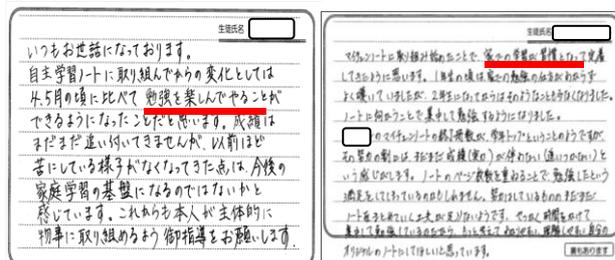


図23：保護者の記録 (K.R.;母親・W.R.;母親)

③ 相互評価

マイチェンノートに取り組んで2ヶ月が過ぎた頃、ノートの相互評価を行った。お互いのノートを見合い、2色の付箋を使って評価した。黄色の付箋にはプラスの評価(良いと思う点・工夫されている点・真似したい点等)を、ピンクの付箋には改善点(直した方が良い点)を記入し図 24 のようにノートの一冊最初のページに貼り付けた。7,8 人に評価してもらったものを本人に戻し、その付箋を確認させ「思ったこと・感じたこと・感想」などを自由に書かせた。



図24：相互評価の場面と付箋・感想

図 24 からわかるように、日々の教師のコメントとはまた違った影響を生徒たちに与えている。

5. 今後の課題

今後の課題として第 1 に、どうしても成績に直結しないと満足できない保護者への対応があげられる。OPP シートの記入では生徒の頑張りを評価しているのだが、それでも定期テストや実力テストを終え 3 者面談などを行うと、成績に反映されないことへのいらだちやダメ出しの発言が多く聞かれる。ノートの変容が即成績につながるわけではないが、ノートの変容ぶりを提示すること、授業にのぞむ姿勢が変容している点を理解してもらうことが必要である。

また第 2 に、表 1 にみられる C・D 層の底上げである。教師がそれぞれのノートにランク付けをするのではなく、生徒一人ひとりが自らのノートを客観視する中でより良いノートをつくるよう考え・工夫し取り組んでいけるような働きかけが大切になってくる。生徒に自分なりのマイチェンノートの到達目標・基準を決めさせ、その基準に対し自分のノートがどうなのかということを自己評価させる必要性を感じるとともに、それこそが自ら学ぶ力の第一歩であると考え。

6. おわりに

本研究を通して、自主学習ノートを作成することにより、自ら学ぶ力の育成が可能になることが明らかになった。

自主学習ノートということについては、多くの中学校教師が取り組んできたことであるが、これまであまり意識化されなかった記録内容を明確化することに加え、「OPP シートを利用した思考や認知過程の内化・内省・外化をうながす働きかけ」「生徒による自主学習ノートの自己・相互評価および保護者評価」という 2 つの視点については、特にその効果が

明らかになったと言えるだろう。

今回教職大学院において、筆者一人では考えることができなかつたサジェスションを得る中で、研究を進めることができた。昨年の小学校での実習を踏まえ今年度は中学校でと、なかなか構造化することが出来なかつた自主学習ノートのひとつの形態と方法を示すことが出来たのではないだろうか。

ところで、それでも毎日三十数冊のノートを回収し、何らかのコメントを加えて返却するのはどこかに無理が生じてこないかという懸念がある。確かに学校現場では、日々の雑務に加え様々な仕事が飛び込んでくる。

しかし、筆者が心がけたのは「1 時間の空きコマ」でチェックし終えることであり、「継続」することであった。日々の継続によって変容する子どもとたちの姿をノートに見取ることが教師の楽しみとなり、これが最優先業務となってくるのである。そしてこの自主学習ノートが、班ノートや個人ノートといった担任と子どもたちをつなぐ交換日記にも勝る教師と生徒・家庭をつなぐコミュニケーションツールになりえるとも考えられるのである。

(参考文献)

- 1) 芦澤稔也. 2011. 「自ら学ぶ力の育成に関する研究」『教育実践研究報告書』. pp117-120
- 2) 堀 哲夫. 2011. 「これからの小中学校で育てたい理科の学力」『指導と評価』 Vol. 57. pp. 19-22
- 3) 堀 哲夫. 2009. 「認知過程の外化と内化を生かしたメタ認知の育成に関する研究ーその 1」『山梨大学教育人間科学部紀要』 Vol. 11. pp. 12-22
- 4) 堀 哲夫. 2006. 『一枚ポートフォリオ評価 中学校編』日本標準,
- 5) 文部科学省. 2008. 『学習指導要領』東山書房, p. 18,
- 6) 文部科学省. 2010. 『児童生徒の学習評価の在り方について (報告)』中央教育審議会